

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一日一回発行）

聖書の眞理

第六十六號

四月號

主筆 江原萬里

基督教と勞農者

現代基督教の三大傾向

ウォルムスに於けるルーテル

イエス・キリスト

民衆の離反（下）

ヘルモン山麓の大告白

幸福の所在

誰がキリストを殺したか

柏木通信

棄教問答

身邊漫筆

江原萬里

主筆 齋藤宗次郎

昭和八年四月一日發行

基督教と勞農者

最初基督教を説いて一番之を歓迎した者は今で云ふ無産者階級であつた。彼等は福音を聞き、本當に之を信じて、自分は富者の僕でなく、王侯の奴隷でなく、何物も有らずとも人間としての品位をもつことを知り、人間としての自尊心が出て來た。之が生活の各方面に於ける新たな活動を喚び起す原動力となり、新世界が開けて來たのである。然るに今の我國の基督教はお上品な宗教となり、其の道德、其の思想は社會の上級者、有閑者には持てるが、一向無産者に訴へない。

今後基督者は此の方面に大に注目すべきである。餓に瀕しつゝある農民、失業、老廢、傷病の不安に常に脅かされて居る都市勞働者に神を示し、自分は何をも有たないが、天地を創造せる神が無上の價値を認め給ふ靈魂を一つ有つて居ること、此の靈魂が救はれた時全世界の支配者となり得る確信を起さしむべきである。

此の目的のため、我國の農村に、又都市工場に、大に

聖書が讀まれ、研究され、信ぜられ、其のために集會が開かれることは何よりも願はしい。人は皆窮乏に苦しんでゐる。然し本當に窮乏して居るものは胃袋ではなくて靈魂である。誰か彼等の靈魂を神が愛し給ふやうに愛し之を生かすために彼等に福音を説く者は出ないか。現代大志ある青年は之に着目すべきである。

現今我が國に官製の成人教育と云ふものがある。あれは元々クエーカーが青年に靈の糧を與へやうとして創めたものである、然るに信仰的盲目なる我が國の政府が其の根本の精神を除いて只其の形骸を輸入し、之を以て都市及農村の青年に社會教育をしやうとしてゐるのである。力なきは勿論その處である。又帝國大學の學生が某教授の指導の下に工場地帯にセトルメントを設けたが、今は事業甚だ不振の由である。之も亦ロンドン南部で行はれつゝある労働宗教週間のやうなものがあつて始めて活かされるのである。若し我が國の労働者、農民の中に本當の福音が入り來らんか、外國人も之を見習ふ如き新しい事が我が國に起るであらう。

聖書之眞理

第六十六號

昭和八年四月一日發行

現代基督教の三大傾向

人はパンのみにて生きるものではない。然れども人は只宗教のみで生きない。世を避け、山に通れない限り、其の時代の政治、經濟、科學の諸影響を受け、之に對して自己の立場を決定することを要求せられるのである。されば現代の諸問題は基督教者に新なる問題を提起し、基督教者は其の解決を迫られつゝある。

之がため現代の基督教に顯著なる三つの傾向がある。その第一は自由主義的傾向、第二は科學主義的傾向、第三は社會主義的傾向、之である。之等は宗教改革以來プロテスタント主義の結果として生じ、又其の反動として起つたものである。而して之が解決は更らに次の時代に

新なるものを創造するであらう。

現代基督教の最も顯著なる傾向の第一は中世以來多かれ少なかれ關連して來た國家的機關との分離である。我國の神道は未だ完全なる分離を見ないが、ロシアが此の度の革命を以て完全に分離したのを最後として、基督教は最早政治の手段として存在するものでない事が明かになつた。此の反面は各人の信仰の自由獨立である。ロシアは別として、各人の信仰は國家の權力外にあり、何人も公定の教會、公定の思想に服従するの要なく、各自自由の教會を作り又教會を作らず、宗教上自分の善しとする道を探り得るやうになつた。此の結果は今在るが如く教會、教派の分裂である。而して此の傾向に對し他方教會合同問題が提起さるゝに至つたのである。各人は自由に思ふまゝに信じ得るならば眞理は何處に於て一致の實を見るべきか。基督教が人類の歴史に最大眞理を提供し之を指導する一大使命を有するならば、その使命は如何にして果さるべきかの問題が提起されて居る。

第二の傾向は科學的傾向である。根本主義對現代主義

の争とは畢竟之を云ふものである。ダーウキンの進化論は現代の思想界に一大革命を起した。その思想が舊約聖書創世紀第一、第二章と衝突することは明白である。爰に於てか天地創造に關する聖書知識を眞理とするか、近代科學を眞理とするかの議論が生じ、從來奉持せられた聖書全部神言説に動搖が起つて來た。而して聖書を一文書として之が科學的研究をなす所謂高等批評の發達は、聖書全部が無謬であるとの主張を破壊するに至つた。由來プロテスタント主義はチリングウオースが云つたやうに、「聖書、聖書のみがプロテスタントの宗教」である。此の聖書に幾分でも誤謬があると云ふ事はプロテスタント主義に對する由々しき大問題である。我等は科學の教ふる所に従ふべきか、それとも天より直示せられたる神の御言なる聖書に由るべきか、その場合聖書とは何を意味するか、全部か一部か、一部とせばその取捨は何によつて決すべきか、かくて基督教が次第に聖書を離れて科學によらんとするに至つた。之れ現代基督教の最も顯著なる傾向の第二である。

第三の傾向は社會的傾向である。近代の産業革命は我等の社會生活を一變した。中世の封建時代は勿論、ルーテル、カルビン等が豫想だにせざりし社會問題が續出した。貧富の問題、財産私有の問題、産業の自由と勞働問題等々。之等に對し最も進歩的思想家は個人的救のみを説く基督教會を保守的とし、反動的とし、宗教を阿片とし、次第に之を嫌惡するに至つた。基督者が基督者として現代社會に義しく生きんとせば、之に對して正當なる基督教の解決を必要とする。然らずんば基督教は眞實生きんためにあへいでゐる現代人には無用にして、社會の桎梏に惱む者には沒交渉となり、只有閑、無職者の道樂又學生の知識慾の資料を提供するに止まるものとなる。ポルテヤが嘲つたやうにやがて百年を出でずして聖書は圖書館の戸棚に塵だらけになつて所藏せられるに至るであらう。

基督教の此の三大傾向について我等は如何に之を考へ如何に之に處せんとするか。本誌は之について常に一個の明瞭なる主張を持し、之を語らんとする者である。

ウオルムスに於けるルーテル

千五百二十一年、即ち今を去る四百十二年前の四月十六日、神聖羅馬帝國皇帝カロロ五世は獨乙の修道僧マルチン・ルーテルをウオルムスの議會に喚問した。

ルーテルがウオルムスへ行くとの報が傳はるやまるで王様の旅行のやうに喧傳された。皇帝は吃驚した。それ故フツテンのウルリヒに使をやつて、若しルーテルをウオルムスへ來ないやうにしてくれたなら、お前に年金をやることさへ云つた。それが駄目と知つて今度はルーテルを脅そうとした。然るにルーテルは少しも恐れなかつた。彼はスパラチンに書を送つて云つた。

ゲオルグ侯に申し上げられ度し。身共はウオルムスに推參致し申すべし。假令そこには惡魔がそこなる屋上の瓦程居らんとも。

數千の群衆は、ルーテルが三人の同伴者と一緒に馬車に乗つてウオルムスを指して行く途上、彼を歓迎した。ウオルムスに着いた翌日、彼は議場に出頭した。其の時

有名な獨乙の將軍フルンドスベルグが彼に挨拶して、

小さい修道僧、お前は是からわしやわしの部下のナイト達が一番手硬い闘ひにさへやつたことのない抵抗をやらうとしてゐるのだ。お前が本當に義しいと確信するならば、神の御名によつて突進しろ。

ルーテルはカロロ五世陛下の前に立つた。其の時のルーテルの様子についてアレアンデルは云つて居る。「馬鹿者はニコニコして入つて來た。そして靜かにあたりを見廻し、肅然たる顔をした」。ルーテルの前に小さい卓子が置かれてその上に彼の書いたものが一杯載せられてゐた。エツクが立つてそれを指し、之は皆お前の書いたものに相違ないか。お前は其の誤謬を撤回する考へはないかと訊ねた。ルーテルは「神の御言を傷けず、私の靈魂を危からしめずして答へるために」暫くの餘裕を乞ふた。議會は協議の上一日の猶豫を與へることとなつた。

翌夕方六時、ルーテルは大元氣で議場に顯はれ人々を驚かした。此の日法王の使節たちは、異端者に發言を許すならば出席しないと云つて出席を拒んだ。エツクは再

びルーテルに自説撤回の意志ありや否やと尋ねた。ルーテルは修道院の僧侶がなす如く、一禮して立ち上り、初めラテン語で、のちドイツ語で一場の演説をした。これこそ人類歴史に新時期を劃したものであつた。彼は悠々として迫らず、泰然として全會衆を前に之を述べた。然るにラテン語もドイツ語も知らなかつた皇帝は、もどかしがつてもつとはつきり云へと命じた。爰に於てか萬世不朽の言は發せられたのである。

陛下若し卒直な答を求め給はば、お答へ申し上げます。私は聖書に由つて又は明白なる道理によつて私の間違つてゐることを證據だてられざる限り、撤回出来ません。私は宗教會議又は法王單獨の決定を信じません。是等は誤つて居るばかりでなく、互に矛盾して居ます。私の良心は神の御言によつて捕へられて居ます。人の良心に反して行動することは安全でもなく、正直でもありません。ですから、神よ、われを助け給へ、私は此以外に何事も出来ません。アーメン。

ルーテルは退去せしめられた。其の時戸口まで来て、「彼を火炙りにせよ」と叫んだ者が多くあつた。然るに獨乙の貴族たちがルーテルを取り圍み事なきを得た。ゲオルグ侯すらルーテルの勇氣には深く感嘆した。

翌日カコロ五世陛下は斷乎たる處置を採らうとしたが議會は賛成せず、遂にルーテルはウキテンベルグに歸還を許された。然るに彼の安全保證はあと二十一日しかなかつた。歸還の途中ルーテルは彼の友人のため隠まはれ秘かにワルツブルグ城に送られた。皇帝は帝國全土に亘つて彼を探し求めたが、彼は安全を得た。カコロ五世帝の内大臣が書を或る者に送つてかう云つた。「ウオルムスは事の終りにあらで始めなる事を思はしめられ候」と。近世史は實にこゝから起つたのである。ルーテルの此の大膽不敵の行動、その立てる眞理、彼の精神、これが人類進歩の原動力となり、その力は今尙消滅せず、その結果は現代に及んでまだ確立しない。これこそ基督教が生ける力である最も顯著なる證據である。

イエス・キリスト (七)

江原 萬里

一三 民衆の離反 (下)

群衆

抑も福音書に「群衆」と云ふのは、一定の主義なく、定見なく、確信を有たない、他の者の煽動にちき乗り易い一般の民衆を云ふ。彼等は只目前の日常生活が安氣に過され、毎日の食ふ物に差支へず、無病息災に、近隣の者と不和なく、毎日の業務が滞りなく続けられ、家に幾分の蓄財が出来、老後を養ふに足り、時々家族一同打ちつどうて楽しみ得ば、それで一生の目的は達したとするのである。彼等はそれ以上に何等崇い願望を有たない。彼等が喜んで聞く福音は何六金儲けの道、何式健康法、等々。此の道を教へ、又彼等にパンを供し、彼等の病を醫さば、之こそ彼等の待ち望むところの救世主である。

されば富者若し彼等に慈善を施さんか、彼等は富者を慕ひ、其者が何方如何なる悪事を働いても敢て之を咎め立てしない。若し自分の欲求に應ぜざらんか、其の者が如何に正しくとも之を恨む。治者彼等の匡救を計り、彼等に利益を與へんか、それがどんな悪棘なる手段を以てし、どんなに政治を腐敗させやうが、治者を徳とする。

若し人氣取りの政策の代りに眞面目な政策を採用し、其の結果不景氣が來らば、極力之を憎む。イエスが權威を以て貧者に福音を説き、生命を賭して虐げられたる者を保護し、驚くべき能力を發揮して永年の難病を治癒し給うた間は、彼等は「實にこれは世に來るべき預言者なり」(ヨハネ傳六・一四)と云つてイエスを王としやうとした。「大なる群衆は喜びてイエスに聽きたり」(マルコ傳一二・三七)である。

やがて幻滅の日は來た。彼等が喜んでイエスに聽き従つたのはパンの爲めであつた。然るにイエスが彼等に與へやうとし給うたものは、パンはパンであつたが、彼等の求めるやうなパンではなかつた。即ち「生命のパン」

であつた事がわかつた時、彼等は馬鹿を見たのである。

まことに誠に汝らに告ぐ、汝らがわれを尋ねるは、
徴しるし(イエスの御業の眞の意味)を見し故ならで、パン

を食ひて飽きたる故なり。朽つる糧かてのためならで、
永遠の生命にまで至る糧かてのために働け。これは人の

子の汝らに與へんと爲るものなり。……神のパンは

天より降りて生命を世に與ふるものなり。(ヨハネ傳

六・二六・二七、三三)

わしはお前たちにパンを與へるために來たのではない
お前たちに與へ度いのは生命のパンだよ。ありふれたパ
ンのためにわしについて來るとはお前たち馬鹿な奴だ、
かく云つてイエスは彼等の願を一蹴し給ふた。之を聴い
た民衆は何と思つたであらう。

日々のパンは勿論人生に必要である。我等はその窮乏
のためにどの位苦しんで居るかわからない。パンの偉大
なる供給者の出現は我等の心から願ふ所である。然し乍
ら、人はパンのみにて生くるものではない。その靈魂は
胃袋とは違ふ。幾らパンを山積しても、人の生命を一日

餘けいに延ばすことは出来ない。混々として盡きる事を
知らない永遠の歡び、神と憎なる聖さ、眞實の愛、肉體
の死の彼方なる榮光の復活、永遠不朽の神の生命、美は
しい神の御國の出現、人が本當に人間としてもつ此等の
義しい願望はパンでは得られず、支へられもしない。別
のパンが要る。此の生命のパンがあつて、肉のパンはそ
れに附加されるのである。『まづ神の國と神の義とを求
めよ。然らば凡て之らの物は汝らに加へらるべし』(マタ
イ傳六・三三)である。

例へば我等は生くるに智慧を必要とする。我等を覆ふ
天、我等を載す地、我等を支へる社會につき、我等は何
をも知らずしては生くることを得ない。我等は我等の周
圍と我等自身とを動かす根本の力の何者であるかを知ら
ずして我等は善く生くることは出来ない。義しくあるこ
とは出来ない。而して人生を本當に人生らしく善く生か
しめる智慧は科學者、哲學者になくして神と親しく交は
る敬虔なる者のみが之を有つことを知る。かゝる生命の
パンは我等が善く生くるために是非とも必要である。

我等は又道德的に義しくあらざれば、善き生活はなし得られない。衣食足つて禮節を知ると云ふ。されど如何に物に富むとも此の世のパン、富、金錢の與へる事の出來ないものは神々しき生活、聖者らしい生涯である。之は只單に一般紳士淑女の道德と思はれる世間的道德を實踐躬行するだけでは得られない。永遠の光が我等の靈魂を照して、始めて我等の顔に崇嚴あり、其の眼に正義と慈悲とあり、其の口に眞理あり、其の行ひは美はしく、其の生涯に或は奪ひ或は憎む此の世の者の有ち得ない尊貴がある。此の生命こそイエスが天より降りて此の地に持ち來たし給ふた生命である。イエスは之を我等に與へやうとし給ふのである。

然し乍ら、一般民衆にはその價值がわからない。彼等の求めるものは花よりも團子である。若しイエスが本當に我等の救主ならば、我等に先づ今日のパンを與へよ。我等は今飢えて居る。今水に溺れつつある我等を先づその窮乏から救へ。然るのち説教。かく云ひて彼等は皆此の世の生活に捉はれて之を求めない。そのために人間本

來の義しき願望は既に失せ、眞人として伸びゆく生命は此の世の煩ひのために妨げられて枯死する。

視よ、種播く者まかんとて出づ。播く時路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。土うすき礎地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、日昇りし時やけて根なき故に枯る。茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。良き地に落ちし種あり、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の實を結べり。耳ある者は聽くべし。(マタイ傳一三)

彼等耳なきを如何せん。『茨の中に播かれしとは、御言をきけども、世の心勞と財の惑とに御言を塞がれて實らぬものなり』とイエス自ら之を説明し給うた。本當によきものを與へやうとしても彼等は受けない。イエスが彼等の困窮を見て憐憫に堪えず、異能を顯はして彼等の病を醫し、彼等の窮乏を満し給へば、彼等はいつでもイエスに隨喜した。イエスは出来るだけ之を避け、『誰にも知らすな』と固く口外を禁じ給うても、民衆は之を聞き傳へてイエスを求めて己まなかつた。然るにイエスが

邪曲よこしまにして不義なる代は徴しるしを求む。されど預言者ヨナの徴しるしのほかに徴は與へられじ』。(マタイ傳二・三九)と云つて之を拒み、教主の證據として奇蹟を行ふことを斷乎として退け給うた時、彼等の熱狂は失望となり、失望は憎悪となり、憤怒となつたのである。誰でも一生懸命に従つた主人又は師から、その最も大切と思ふ願をになく拒否された時は、今までの心からなる尊敬はからりと一變して本當の憎悪となる。イエスが一般民衆の仰望する如き意味の救世主でなく、世間的幸福が彼の本來の目的でない事がわかつた時、誰か彼等を煽動する者が出て来るや、今までホザナと歡呼して迎へた群衆は失望に驅られて『十字架につけよ』とわめき叫ぶに至つた。恩人が最早恩人でないと思はれた時程憎まれるものはない。

民衆ともに叫びて言ふ。『この人を除け、我等にバラバを救せ。』此のバラバは都に起りし一揆と殺人との故によりて獄に入れられたる者なり。ピラトはイエスを赦さんと欲して、再び彼等に告げたれど彼ら叫びて『十字架につけよ、十字架につけよ』と言

ふ。ピラト三度まで『彼は何の惡事を爲したるか我その死に當るべき業を見ず、故に懲しめて赦さん』と云ふ。(一體何を懲しめやうとするのであるか)。されど人々、大聲をあげて迫りて十字架につけんことを求めたれば、遂にその聲勝てり。(ルカ傳二二)

『遂にその聲勝てり』思慮を失つた群衆はルボンの所謂群衆心理の虜となつて前後を顧みず、その最大の恩人を殺して仕舞つたのである。民衆はイエスが其の異能を發揮して己に敵する者を粉碎し給ふ意志の全然ないことを知つて居た。故に思ふ存分イエスを嘲けり、虐げても大丈夫と思つた。それ故の此の狂暴である。

ピラトは何の効ひきなく反つて亂にならんとするを見て水をとり民衆のまへに手を洗ひて言ふ。『この人の血につき我は罪なし。(罪なしとは云はれない。不義に敗け正義を殺した。汝等みづから當れ)民みな答へて言ふ。』その血は我らと我らの子孫に歸すべし』爰にピラト、バラバを彼等に赦し、イエスを鞭むちちて十字架につくる爲に付せり。(マタイ傳二七)

民衆とはこんななまで盲目になるものである。

罪のあがなひ

かやうにしてイエスは社會の特權階級から憎まれ、又其の不義のために苦しめられて居る民衆からも棄てられ彼等双方から殺され給うたのである。彼等は『神の民』を以て誇り、全世界のうちに本當に神を知る者は自分らだけであるとし、常に神から與へられた律法を遵守し、之を以て世界に神を示し、諸國民を教へ導く者であると目任した者であつた。然かも神の子イエスは彼等のためにかくも憎まれて殺され給うたのである。

イエスは本當に神の聖意に忠實であり、眞實に神の愛を以て人々を愛し給うた故に、其等の者から憎まれて殺され給うたのである。全人類殊に恵まれて神の選民と言はれたユダヤ人すらかくの如し。イエスは實に我等全人類の心の奥底に潜める罪、神に對する罪の犠牲となつて殺され給うたのである。彼の死は我等各自の神に對する反逆の白日曝露であつた。若し我等の罪を知らうとするか、イエス・キリストの十字架を仰ぎ見よ。

此の罪、人間の中に此の罪の内在する事は事實であるそれは只の迷ではない。思ひ違ひではない。知識でなく感情でなく、我等の意志が實際に腐敗して居るのであるそれ故その爲すところは悉く邪惡である。而してそのために今の世の不幸、悲慘があるのである。あゝ一度神の御子顯はれ給うや、厄鬼となつて之を殺そうとする此の恐ろしき罪！ 此の罪の存する限り、我等は眞實に神の子となり得ない。否、如何に神は愛なりとて、此の神への反逆、意志の邪惡を看過して其の爲すがままに許し置き給ふことが出来やうか。惡を惡とせずして善が善であり得やうか。不義が罰せられずして義が維持出来やうか。世に惡が看過され、不義の横行が默認され、善が抑へられ、義が行はれずして然かも猶神は愛なりと云ひ得やうか。罪を怒らず不義を罰しない者は神ではない。不義を其の儘に許すことは愛ではない。神の御子を殺すものが神の子たり得るか。

然り、イエスの御父なる神は愛の神であり給ふ。それ故人類の此の罪を無視し又默認し給はない。然かも愛な

る神は罪人の一人だに滅ぶことを好み給はない。其の罪を贖うて之を子とし給はんとする。愛の最大の要求は愛する者のために己を犠牲とする事である。神は正義を維持し、正義を以て永遠に我等を愛し、我等かかる罪人をして滅亡を免かれしめ、將來に光榮の御國を備へ給はんがため、我等の罪を罰して之を滅ぼす代りに、崇高なる眞に神らしい道を探り給うた。即ち、己を犠牲として人に與ふることである。御子の死、之れ神御自身の我等罪人に對する無限の愛にあらずして何であらう。此の死に由つて我等の罪は處分されたのである。

イエスは眞實に神を知り給うた。其の聖意の何たるかを悟り給ふた。而して絶對に之に服従し、聖意の成就を以て己が降世の任務となし給うた。それ故彼は我等の永遠の救主で在し給ふ。彼は既にガリラヤで教ふべきことは教へ、示すべきことは示し給ふた。今や降世の最大の御業に向つて進むべきであつた。

一四 ヘルモン山麓の大告白

イエス、ヒリボ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たち
に問ひて言ひたまふ。「人々は人の子を誰と云ふか」。
彼等云ふ。「或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ

或人はエレミヤ、また預言者の一人」。彼等に云ひたま
ふ。「なんぢらば我を誰と云ふか」。シモン・ペテロ答
へて云ふ。「なんぢはキリスト・活ける神の子なり」。

(マタイ傳一六・一三—一六)

ガリラヤの危機

イエスのガリラヤ傳道は五ツのパンと二ツの魚とを以て五千人以上の人々を養ひ給うた時、その最絶頂に達した。民衆は之を見て『實にこれは來るべき預言者なり』と云ひ、イエスを奉戴して王となし、ヘロデ・アンチパスを追ひ、ロマの主權を覆へし、彼等が豫てから企圖して居た新社會を建設しやうとしたのである。此の事は既

に説いた。

若しイエスの建設し給ふ神の國が此の世の國であり、イエスが現世の社會革命家であつたならば、これはイエスの大成功であつた。好機逸すべからず、直ちに此等の群衆を指導して社會革命の運動を起し、理想の新社會を建設すべしである。若しイエスが此の時彼等の願に應じて起ち給うたならば、ガリラヤ全土は勿論のこと、近隣諸國の民も亦、風に臨んで來り會し、史上劃期的大事件が起つたに違ひない。或はロマ帝國が減び、之に代つてユダヤ帝國が出現したかも知れなかつた。

然るにイエスは此の騒を見て、飛んでもないことをすると云つて之を拒否し給ふた。イエスが最も恐れ給うたのは、ペテロ以下イエスの最も親しい弟子たちが群衆の熱狂に捲き込まれ、彼等と一緒になつて此の運動に参加しはしないかと云ふ事であつた。若しそうなつてはイエスの御業は臺なしである。それ故

イエス直ちに弟子たちに強ひて舟に乘らせ、自ら群衆を返す間に、彼方の岸に先に往かしむ。(マタイ傳

一四・二二

『直ちに』『強いて』に由つてどの位急迫状態に在つたかが想像出来る。弟子たちは群衆の此の熱狂に大喜びし彼等が豫てから一切の物を抛つてイエスに従つたのは之あるからだと思つたであらう。然るにイエスは群衆が熱狂するや『直ちに』、いやがる弟子たちを『強いて』舟に乗せて彼方の岸にやり、御自分だけ残つて只獨りで群衆を鎮撫し、之を去らしめやうとし給うたのである。

斯くて群衆を去らしめてのち、祈らんとて竊に山に登り、夕になりて獨りそこにゐ給ふ。(二二)

『竊に山に登り』、日暮れても『獨りそこにゐ給ふた』。群衆にとつつかまるのを恐れてそこに留り給うたのである。ヨハネ傳によれば

イエス彼等が來りて己をとらへ王となさんとするを
知り、復またひとりにて山に遁れ給ふ。(六・一五)
とある。

多くのイエス傳は此のガリラヤ傳道の危機を目して、人心イエスを離反し、イエスを捨て、去つたものとする

かくて將に神の國が地上に出現せんとするまで盛大に向ひつゝあつたガリラヤ傳道は遂にイエスの大失敗に歸しイエスは此の時人々の心の反覆常なきを知つて、痛切に孤獨を感じ給うた。爰に於て、イエスは今までの方法を以てしては到底最初の目的なる神の國建設の不可能なるを知り、エルサレムに上り、十字架の上に死し、以て犠牲の道の人々に教へ、己が死後やがてその出現を期待し給ふたのであると説く。

然るに福音書の記事を精讀する時、此の時離れ去つた者は民衆でなくして、實はイエスであつたことがわかる。民衆は熱狂してイエスを王としやうとしたのである。然るにイエスは之をきらつて山に遁れ給ふた。そして其の翌日うるさくも附き纏ふて來た者に、殊更に難解な言葉を用ひて彼等を昏迷せしめ、之を追ひ拂ひ給うたのである。

外國 微行

此の事件に次でエルサレム本部から派遣されたバリサイ人との大論争があつた。此の事は前號で述べた。此の事あつて以後イエスは公然民衆に教へることをやめ、只弟子の教育にのみ全力を集中し、且つ民衆を避けて、ユダヤの國境を越え、外國に微行された。彼はユダヤを去つて地中海沿岸を北の方フエニキヤ地方にゆき、昔は殷盛な港であつたがその頃は既に寂れて居たツロ、シドンを訪うた。『イエス こゝを去りてツロとシドンとの地方に往き給ふ』(マタイ傳一五・二一)とある。

然るにその地方で『家に入りて人に知られじと爲給ひたれど隠るゝこと能はざりき』(マルコ傳七・二四)。そこで一人の女が逸早くもイエスなる事を發見して、『主よ、ダビデの子よ、我を憐み給へ』と叫んで、瀕死の娘の病氣を醫し給はんことを願つた。『されどイエス一言も答へ給はず』。然かも女の熱心な求めに根まけしてそれを醫し給うた。多分此の事あつてイエスは匆々そこを引上げ、他の町にゆかれたであらう。イエスの外國旅行は微行であつて、心して何人にも知られないやうに勉め給う

たのである。決して異邦教化を目的としてではなかつた
醫された娘の母に『我はイスラエルの羊のほかに遣はさ
れず』と答へ給うたのもそのためであつたらう。(マタイ傳

一五・二四)

イエスはこの地を去り、遙か北方のシドンにゆき、そ
こからいづれの道を辿り給うたかはわからないが、再び
ガリラヤに歸へり、足を東に轉じて、こゝを過ぎ、ヨル
ダン河を涉つてその東方ビリポ領なるデカボリスの地方
に旅し給うた。而してそこから引返へして祕かにガリラ
ヤに歸へり來給うた。然かもガリラヤの湖の北岸に近き
ベツサイダを通り給うた時、ある人々イエスを見知り、
盲人をつれ來て之を醫し給はんことを乞うた。『イエス
盲人の手をとり村の外につれゆき』とある。多分イエス
は盲人の連れを村に残して、只彼だけを村の外につれ出
し給うたのであらう。かくして人に知られぬやうに其の
盲目を醫し、『村にも入るな』と云つて、連れの者をお
いてけぼりに、彼をすぐ自分の家に歸へらしめ(マルコ傳
八・二三・二六)、村人の注目を避け、十二の弟子を伴ひ大

急で此處を立ち去り、足を北に向け、ヨルダンの流に沿
ふて上へ上へと之を廻り、メロムの湖水を經、沼地の間
を縫ひ、遂にヘルモン山麓、ビリポ・カイザリヤ地方の
淋しき村々に出で給うた。こゝは既に聖地の國境外であ
る。イエスは再び外國に忍び出で給うたのである。

何故イエスはかやうに人目を避けて外國旅行をされた
のであらうか。第一の理由は勿論ガリラヤに居るときは
民衆が熱狂してイエスに従ひ、彼等の誤れるメシア觀か
らしてイエスを王とし、此の世の國の建設を目論むもの
が多いからであつた。イエスの國外微行の動機は、民衆
の熱狂を避けるためであつた事は明瞭である。

第二の理由は、ヘロデ及びバリサイ人の魔手を逃れる
ためであつた事も疑の餘地はない。ヘロデ・アンチパス
が民衆の多大の尊敬を受けてゐた洗禮者ヨハネを殺した
事はいたく民心を刺激した。民衆は正義の當然の要求と
してヘロデの暴虐に對して報復を願つた。イエス若し眞
に正義に基く國を建設し給ふ者ならば、先づヘロデをこ
ぞ罰し給ふべきではないか。かくして民衆はイエスに由

つて革命運動を起さうとしたのであつた。さればヨハネを殺した次に、ヘロデがイエスを殺さうと企てるのは理の當然である。イエスの在し給ふ間はヘロデのガリラヤは安泰ではない。

而してパリサイ人も亦イエスのガリラヤに於ける傳道に對して多大の嫉妬と憎惡とを懷き、その傳道が今や盛となり、ガリラヤのみならずユダヤ全土に派及し始めたため、エルサレムに在るパリサイ人の本部のものも事態捨て置き難く思惟して、人を派しイエスを難詰せしめた（マタイ傳一五・一以下）。而してイエスのため却つて小非道く彼等の教の偽善を責められ、其の虚偽を暴露された事は前に述べた。彼等は憤然としてイエスを去り、エルサレムに歸つて之を報告したのであらう。そのため彼等も亦ヘロデと共同戦線を張つたであらう。かくしてイエスのガリラヤ傳道は最早事實上續行不可能となつた。

パリサイ人いで、直ちにヘロデ黨の人とともに如何にしてかイエスを亡ぼさんと議る。（マルコ傳三・六）

とあるのは、その前既にガリラヤ地方のパリサイ人がヘ

ロデ黨に加担した事を云ひ、今之にエルサレム本部のパリサイ人も亦加はるに至つたのである。今やイエスの死は確實となつた。イエスは彼らの魔手を逃れるために外國に微行し給うたのである。

國外微行の根本理由

果して然らば、イエスは僅か數十年の地上の生命が惜しさに逃げ隠れ給うたのであるか。否、全人類が擧つて反對しても、百萬の大軍が來襲しても、イエスを恐れしめることは出来なかつた。或る聖書學者は最新の研究として、イエスを我等と違はない弱々し人間であつたとする。之は大きな間違である。世にイエス程の勇者は他に之を見る事が出来やうか。義を泰山の如く重じ、生命を鶴毛の如く輕する者にして彼の如きはない。偽善なるパリサイ人何かある。卑怯なるヘロデの輩何するものぞ。イエスは死を恐れて逃げ隠れ給うたのではなかつた。

或るパリサイ人ら、イエスに來りて（多分脅して）云ふ。「いでて此處を去り給へ、ヘロデ汝を殺さんと

す。』答へて言ひ給ふ、『往きてかの狐に言へ、……今日も明日も次の日も我は進み往くべし。それ預言者のエルサレムの外にて死ぬることは有るまじきなり。』(ルカ傳一三・三一—三三)

イエスが外國にまでヘロデとパリサイ人との魔手を避け給ふたのは、決して此等の『穴にひそむ狐』、『塹に巢ふ空の鳥』を恐れたからではなかつた。イエスは犬死を恐れ給ふたからである。洗禮者ヨハネのやうに死海の沿岸マケラスの牢獄に永く幽閉され、淫蕩なる婦女子の怨恨の犠牲とされ、一夜の歡樂の宴の代價として殺されることは尊きイエスの御生涯の目的ではない。『神の子』は堂々と『神の都』エルサレムに上り、萬人の目の前に全人類の罪を負うて『神の民』のために十字架に死し給ふべきである。安ぜよ。汝パリサイ人よ、ヘロデの黨よやがて時は来る。『それ預言者はエルサレムの外にて死ぬることあるまじきなり』である。

それならば事態既に切迫して居る今日此の頃、何故イエスは直ちにエルサレムに上つて死し給はず、却つて人

目を避けて外國にまでうろつき給ふたのであるか。それには重大な理由があつた。イエスは民衆の熱狂をさけ、彼等から離れ給うて以來、専ら弟子の教育に全力を集中し、彼が建設し給ふ神の國の性質、その王たる者の任務さてはイエスの眞實何者であり給ふかを悟らせやうとし給うたのであつた。そのため人を避けて諸々を徘徊し給うたのである。然かもイエスのメシヤたるは、當時一般のユダヤ人の抱懐するメシヤ觀と、その間多大の相違があつた。それ故ユダヤの空氣以外に出でゆき、弟子たちをして天地を主宰し、嘗にユダヤ人のみならず、全人類を支配し給ふ神とその遣し給へる御子、而して全人類の救主たる者の如何なる者か、それを悟らせる必要があつたのである。そのため國外微行であつた。

イエスは今まで何人にも自分はイスラエルの民族の希望なるメシヤであると明言し給はなかつた。今専ら弟子たちに教ふるにも亦、彼は數學の教師が問題を提出して學生に之が解答をなさしめ、自ら答を彼らに示さないと同様に、彼等に對しても亦、我は、神の子而してメシヤ

即ちキリスト、救世主であると明示し給はなかつた。弟子たちをしてつらく彼を見、彼の言を信じ、彼の教を實行して見て、心から彼の神にして又救主たる事を悟らせやうとし給うたのである。

ブラウニングの名詩、ラビ、ベン・エヅラはイスラエルの民が何故イエスを信じなかつたか、其の不信について同情ある辯護をしたものである。神はその昔イスラエルの民に必ず遵守すべきものとして御言を與へ給うた。そして民は實際それに忠實であつた。神は彼等に終りの日キリスト來り、その任務を解くまでは立ちて見衛れと云ひて宛かも曠野の中に立つ淋しい哨兵のやうに此の世界に立たしめ給うた。而して彼等はよくその命を守つた。彼等は永いことキリストの來り給ふのは今か今かと待つた。寒風嘯く長き暗の夜も、主いつ來り給ふかと夜通し待つた。然かも嵐の夜は明けはなれたが空はどんよりとして曇り、美はしい太陽の光は照さず、希望は只一場の夢に終つた。約束されたる王に就ての約束は果されず、來るべき救主は來らず、空しく幾年をか過ぎた。而して

遂にナザレのイエスは來り給うた。然かも彼は我らの見るべき王たる美しき容貌なく、我らが救主として慕ふべき艷色がなかつた。彼は

歩哨の唯中に來れり、

星影の下、怪しき名を名のりて。

イスラエルは彼を知らなかつた。來るべき者は彼なりと信じ得なかつた。遂に『汝はキリストにあらず』と云つて彼から離れ、爾來幾代も幾代も今尙昔のまゝ歩哨をつとけて居るのである。

之がブラウニングの詩の意味である。イエスは自らメシヤと名のり給はず、人々が彼の爲し給へる奇蹟を見て『これは來るべき預言者』なりと云ひ、彼を王としやうとするや、彼等を通れて去り給うた。『師よ、われら汝の徴を見んことを願ふ』と云つて、奇蹟を行つて見せて彼のキリストであり給ふことの確信を得んとした者には「とこしよ邪曲にして不義なる代は徴を求むしるし。されど預言者ヨナの徴のほかに徴は與へられじ」と云つて之を拒み、「彼等を離れて去り給ひぬ」(マタイ傳一六、以下)とある。

キリスト若し今の世に大なる奇蹟を行ひ、大事業をなし給ふならば、世の人々は今尙彼の活ける事を知り、その能力に驚き、愕然として彼を仰ぐであらう。然し昔も今もキリストは超自然的驚異を行ひ、我等の畏怖又は好奇心に訴へて以て自分の人間以上の者、即ち神の子に在し、我等の救主であり給ふ事を信ぜしめやうとし給はないのである。それは奇蹟によつて信じた信念は直ぐに損じ易いからである。難病の治癒、窮迫からの脱出等、之を信するに至つた原因が除かれた後は、容易に疑が起り安い。此の經驗を以てしたのでは此の世の力に對抗して身を献げて飽くまで救主に信従せしめるに足らない。病癒えた時は大に感謝するが、その感謝はやがて此世の快樂のために忘れられ、病の癒えた事をすら、その原因を神以外の他のものに歸するに至る。

只イエスの教をその儘に神の御言と信じ、彼を我等の新生命として受け、彼に己が生命を献げて見て感ずる心の喜悅、明朝、希望、此の世ならぬ聖靈の實在の經驗、之に由つて我等は始めて彼が神の子であり、我等の救主

であり給うことを悟るのである。世の人が無視し、輕蔑し、嘲笑する彼に心から仕へて、我等の靈魂は確實に神と義しき關係に在る事の確信を得る。

さればイエスはガリラヤに於て何人にも、然り、親しき弟子にすらも、自ら我はキリストなりと明言して、之が信仰を求め給はなかつた。只彼等の心の内に自發的に此の確信の生ずるのを待ち給うたのである。

活ける神の子、キリスト

今やイエスは十二弟子を伴ひ、ヨルダン河の源近く、ヘルモン山麓を旅行して、道にて弟子に問ひ給うた『人々は人の子を誰と云ふか』と。人の子とはイエスが自分のことを指して云ひ給うた語であつた。之にメシヤの意味はない。若し之をメシヤの意味で用ひられたならば、此の間は意味をなさない。「世間の者は一體わしを誰だと思つてゐるか」との間である。弟子たちは之に答へて『或る者はバブテスマのヨハネのやうな人、或る者はエリヤ、或る者はエレミヤの再來、また預言者の一人』と

噂してゐる事を告げた。當時メシヤ出現の前にかゝる預言者が先驅者として出現する事が信ぜられてゐたからである。「エリヤは先づ来るべし」である。(マタイ傳一七・一〇以下参照) 之に由れば此等の者はイエスをキリストなりと信じたのではなかつた。

ここに弟子たちがイエスに告げた世評は、當時イエスに従つた多くの弟子たちの間に於て語り合はされ、論じ合つたイエス評であらう。弟子たちは流石にパリサイ人がイエスを侮辱して「食を貪り、酒を好む人、また取税人、罪人の友」と云つた事については語らなかつた。

イエスは勿論世間が自分をどう思ふかを氣にして之を弟子に聞き給うたのではなかつた。只事の順序として問ひ給うたまでである。さればイエスは折返して彼らに問ひ給うた。『そんならお前たちは何と思ふか』。

嘗て終夜山上で祈つて、將來イエスの御業の證のために選んで十二の弟子とし給うた彼等、彼らがイエスを如何に見、如何に思ふかは、イエス御自身には最大の關心事である。即座にシモン・ペテロは答へた。

なんぢはキリスト、活ける神の子なり。

あなたは我等神の選民ユダヤ人が父祖以來多年その出現を今か今かと待ちに待つたメシヤであり給ひます。否ユダヤ人はメシヤは神の大能を以て來ると雖も、彼は世界最大の人と思つてゐますが、あなたは人にして人ならず、神が人となつて此の世に顯はれ給うた方、即ち神の子に在し給ひ、我等の神エホバとして拜し奉る方であります。之がペテロの即答であつた。何たる大膽、何たる卒直、何たる確信ぞ。

若し之がローマ大帝國の皇帝に對してならば、或は侍臣が阿諛してかかる言を發したかも知れない。然るに今や『神の民』に憎まれ、追はれ、殺されやうとして天の下に隠れ家もなく、難を隣國に避けて各地方に轉々せる一村夫子に對して、かゝる偉大なる告白が又とあらうか宇宙絶大なる眞理にあらすば世界最大の迷語である。由來ユダヤ人は熱烈なる一信教徒であつて、エホバの外に神を拜する事を最大の罪惡とした。然るに今之等の弟子は生ける一介の人を仰いで神として拜せんとする。

ルステラのちんばに救はるべき信仰のあるのを見て、パウロが彼に大聲で『起て』と言つた時、彼は躍り上つて歩んだ。それを見た群衆は驚き怪しみ、『神たち人の形をかりて我等に降り給へり』と言ひ合ひ、バルナバをゼウス、パウロをヘルメスと稱び、町の外なるゼウスの宮の祭司は數匹の牛と花飾とを門前に携へ來り、此等の群衆と一緒にたつて供物を此の兩人に獻げ、神として拜しやうとした。バルナバとパウロは之を見て大に驚き、自分の衣を引き裂き、群衆の中に逃げ込んで、大聲に叫んで言つた。「君達は一體何をするのだ。僕は君達と同じ弱い人間だ。飛んでもない事をしては困る」。〔使徒行傳一四・八以下〕然るにイエスはペテロの答を聞くや、肅然として、

バルヨナ・シモン、汝は幸福なり。汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教會を建てん。黄泉の門はこれに勝たざるべし。われ天國の鍵を汝に與へん。(マタ、傳一六・一七—一九)

と云ひ給うた。何たる崇嚴の言ぞ。此の事を自ら弟子に教へず、弟子が自ら之を悟つて彼に告白するや、『そうだ、お前はよく云つた。その通りである』と云ひ給うたのである。『お前の此の大真理、それは今までの父祖傳來の宗教の教へるところではない。天にいます我が父の新なる啓示である。これこそ、然り、我を神の子キリストと信する信仰こそ、萬世に亘る救の磐だ。此の信仰、この磐、此の上に我が教會を建てると云ひ給うたのである。弟子たちの偉大なる告白に對する、それにも増して更らに崇高なる回答であつた。』

私はこゝにイエスの云ひ給うた教會の何であるか、それが神の國と如何なる關係を有するか「此の磐の上に」と云ひ給ふた磐(ペトラ)が、ロマ・カトリック教會の懸命に主張するやうなペテロ個人であるか、或は同じく懸命に主張する初期宗教改革者の説の如く、ペテロス(ペテロ)でなく、此の時ペテロをしてペテロたらしめた彼の告白せる信仰であるかについて、聖書學者の議論を述べやうとしない。今に至るまで公平なる聖書學者の説は

二ツに分れてゐる。只私は私の信する處を述べる。

私は神の子にしてキリストなるイエスは、決して誤り易きペテロの上に、彼が萬民の救に關する教會を建て給はなかつと信する。萬世に亘り不滅の眞理の上に、然り父なる神が我等に啓示し給うた天啓の上に、之を信じて固く立つ信仰の上に、此の世に對して基督の福音を證しする基督の教會は建つ。それは人なるペテロでない。血肉にあらず、天なる父の示し給うたペテロの告白がそれだ。何人もイエスをキリストと心に信じ、口に云ひ顯はして、我等は此の世から召されたる神の民、聖徒の一團即ち教會の一員となる。イエスをキリストと信する信仰には地獄の門も之に勝つことを得ず、天國（神の國）に入る鍵は（此の世の教會に入る鍵ではない）こゝに在る。

若しペテロに答へ給うたイエスの此の言をロマ教會の解するやうに解しやうとせば、餘りにも教會くさく、制度的、人的となつてヴェントの云ふやうに後世の教會が挿入した文句らしく思はれて来る。イエスは決してかゝる意味で之を語り給はなかつたと信する。

爰にイエス己がキリストなる事を誰にも告ぐなと弟子たちに戒しめ給へり（一六・二〇）

何故、公言するなと戒しめ給うたのであらうか。それはイエスが神の子であり給ふとは當時何人も信ぜざるところ、之を公言する時は時來らざるに明かに無用の問題を起すのみならず、イエスがメシヤ即ちキリストであり給ふ事も亦、當時のメシヤ觀と根本から異なるものがあったからである。昔にそれのみでない。今告白した弟子たちすら、その答は眞理であつたが、まだ自分が何を言つて居るのか自分で充分に理解してゐなかつたからである。この事は直き明かになつた。

躓きの岩なるペテロ

然し乍らイエスは兎にも角にも弟子たちを導き、彼らをして確信を以てイエスを神の子且つキリストなりと告白し得るまでに至らしめ給うた。彼世に來り給うたのに人々皆彼を知らず、彼を誤解し、眞に受けない時、兎に角、大水來るも流すことを得ない神の啓示を受け、その

磐の上に立たんとする者が出て来たのである。

この時よりイエス・キリスト、弟子たちに己のエルサレムに往きて長老、祭司長、學者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日目に甦るべきことを示し始め給ふ。

『この時より』、此の大告白があつてよりである。イエスをエホバに等しき方とし、且つユダヤ人が多年出現を鶴首したるメシヤなりと認めたその時よりである。「イエス・キリスト」、何をか弟子たちに明示し始め給うたか。曰く、自分はこれから首都エルサレムに上り、そこで一國の代表者からなぶり殺にされて死し、死して後甦るのだと明言し給うたのである。

以前にもイエスは弟子たちに己が受難について語り給うた事は數度あつた。然し乍らくも明白に之を示し始め給うたのは此の時からであつた。然かも此の位弟子たちに取つて意外なことが又とあらうか。メシヤは神の大能を以て此の國に來り、エルサレムを中心として世界を平定し、理想の王國を建設し給ふ方であるとは凡ての人

の信じたところ、弟子たちも亦多分に漏れなかつた。

「あなたはメシヤであり給ひます、神であり給ひます」と言うたのに對し、そうだその通り、神の國に入る鍵はその告白であると言ひ給へるイエス、それがこれからエルサレムに往き、そこで人々になぶり殺しにされるとは又かくせざれば神の國は建設されずとは、弟子たちはどう考へても譯がわからない。今し大告白をして得意満面の『ベテロ、イエスを傍にひき』先生、先生、ちよつとと叫んで愚にもイエスをたしなめた。

主よ然あらざれ、此の事なんちに起らざるべし、神がそんな事をあなたにおさせなざるものですか。此の言を聞くや、大喝一聲、イエスは憤然としてベテロを叱りつけ給うた。

サタン、どけ、貴様は誘惑だ。お前は神の事を思はず、反つて人のことを思ふ。

どの位此の言が峻しかつたか、イエスが此の時己を誘惑するサタンに直面して之と戦ひ給うたのである。その時の容貌のどの位凄まじかつたかは想像に餘りある。父な

る神の聖意は人を救ふために自分が十字架上に死する
 とに在る。この死から他の道に我が心を轉せしめやうと
 するのは正しく神の事を思はず、只人の事をのみを考へ、
 贖ひの死なくして罪の赦、永遠の祝福あらしめんとする
 ものである。ペテロの諫告はイエスの降世の目的、その
 生涯の御聖業を破壊するものであつて、たしかにイエス
 には大なる誘惑であつた。見よペテロ個人は決して教會
 の基礎でない事を。今少し前イエスをキリストと告白し
 乍ら、然かもイエスが眞にキリストの御業について語り
 始め給ふや、直ちにイエスを誘ふサタンに變つた。
 此の事件によつて、ペテロを始め弟子達のメシヤ觀が
 どの位、イエスのそれと異なつてゐたかがわかる。イエ
 スが救主としての神の御業は明に當時の意想外とするこ
 ころであつた。私は次に當時メシヤについて異なる三つ
 の觀方が聖書にある事を語らねばならない。

幸福の所在

我等は幸福は幸福であつて不幸でなく、不幸は決して
 幸福でない」と知る。然るにイエスは言ひ給うた。「幸福
 なるかな、貧しき者、いま飢うる者、悲しむ者、人に棄
 てられた者よ」と。一言にして之を言へば、「幸福なる
 かな不幸なる者」と云ふことである。果して然るか。

我等は勿論不幸は不幸と知る。然れども、不幸に在る
 時程我等をして現在の自分に不満足を感じ、もつと善き
 事を求めしめる者はない。不幸に陥れば陥る程、我等は
 本來かく在るべきでない事を知り、眞に善き自己を他に
 求める。此の願を満し得る救主を求める。而して遂にイ
 エスをキリストとして拜するに至らしめる。全世界の最
 大の富を以てするも比べ物にならない神の子イエスを我
 が救主とした幸福が何處にあらう。

最大の幸福の所在はキリストに在る。之を發見する場
 所は人生の不幸である。最大の不幸なる十字架の苦難に
 將來の榮光がある。故に不幸が幸なのである。

誰がキリストを殺したか

キリストの一生程の悲劇は史上其の例がない。我等が知り得たる人類最大の聖者が其の聖愛の故に憎まれ、殺され、廣き宇宙に唯獨り其の不義を満喫し給うたのである。若し人生の悲哀を本當に經驗した者があつたならばそれは彼だ。『すべて行路の人よ、なんぢら何ともおもはざるが。エホバその烈しき震怒の日に我をなやましてわれに降したまへるこの憂苦うれひにひとしき憂苦うれひまた世にあるべきか、考へ見よ』(エレミヤ哀歌一・一二)である。

此の生涯を書いた新約聖書中の四福音書は世界最大の文學である。然かも之は創作でなくして事實の記述であつた。實際世に起つた事であつた。そうでなければ、かやうな深刻極りない事件は人間が到底想像し得ず、之を書き得ない。

人生に此の大悲劇がある。人生は決して薔薇の花咲き薫る春の花園ではない。キリストは公生涯の最初から自分の受くべき苦難を明に豫期し給うた。彼はそれを避け

やうとせず、又それを自分の運命として諦らめたのでなく、自分の意志でその道を選び取り給うたのである。彼は十字架の死を己が目標として、それに向つて一步一步と不斷に進みゆき給うた。そして十字架上「事畢りぬ」と云つて死し給うたのである。

然し乍ら、キリストが十字架に死し給ふためには、彼の意志の他に種々なる力が働いた。パリサイ人、ヘロデ黨、サドカイ人、ローマ人、當時のユダヤの社會状態、然り、人類全體がそれに向つて働きかけたのである。其中の單一の意志がキリストの死を決定したのではなかつた。全體が各々勝手に働きつゝ、何者とも知れず、各自を超越する一つの大きな決定力となつてキリストを死に至らしめた。ここに人間の自由意志の上に、更らに深い何者かの意志があつた。攝理があつた。神の聖意があつた。之をキリストは認め、自らの自由意志を以て之に服従することを己が義務とし、且つ之に人類を罪から救ふ最善の恩恵を認め、之を喜んで我が物とし給うたのである。彼が死からの復活の豫期はそれから來た。

柏木通信 (第廿八信)

齋藤宗次郎

柏木の近状 父なる神の御心を汲んで眺め行けば、天然人生悉く善からざるなしである。日は出で、日は暮れる、夜は過ぎて朝は臨む。我等は其間に光と闇と平和と戦亂と健康と疾病との色々のものを見且つ味ふ。斯くて日々に織り成す攝理の錦は、主の再臨榮光の日を迎ふる時に、我等希望に生くる者の手に高く掲ぐる歓迎の旗となつて現はるゝであらう。立春と共に靜子夫人は湯河原から元氣好く歸られた。梅と椿と水仙とは偽りなき唇頭の笑みを呈した。語學の才に長ぜる鈴木朝美氏は當分編輯室に加はることゝなつた、我等は之を喜んだ。札幌なる祐之博士難症の報に接した。慈母の心中を思ひ潰られた。我等は只管に祈つた。短信數回の後光明を認むとの電報を受けた。空にも本當の春の來れるを感じた。越後の木村孝三郎氏より内村先生の角管時代の珍らしい寫眞を送られた、之を凝視して當時の苦闘を偲び、正義と眞理とを死守するのは如何に困難なるかを察した。名古屋常治氏高齡の母堂を九州松浦の里に失はれしと聞いて

同情した。本宮の高橋新藏氏は原瀬氏兄弟と共に全集に對する謝意を傳へて來た。信州なる井口氏より病床の感千葉の葛卷氏より教育界勇退の決心を報じて來た。峯岸輝男氏は佳耦を興へられた。獨立堂書房は神と師と人とに仕ふるに便する爲に三月初旬大久保驛前通に移轉した余は海嘯に襲はれし三陸海岸の親戚知友に同情を寄せた寔に黄紫黑白の錯雜なるかな。人生とは此の様なる所である。我等は其處に神の絶對愛を認めて信頼感謝希望の日を續け行くのである。

内村先生三週年記念會開催の準備 偉大なる人物の記念會を開くは容易のことではない。單なる思ひ出と賞讃尊敬のみに止つてはならない。其福音に預りし人々は感謝と共に身を以て眞理を證明し且之を世に頒つる責任を有し、其預言に觸れし人と國とは眼を覺して悔改の實を現はすの義務を負ふものである。其眞意を載して二月中旬我等二十餘名柏木今井館に集り且つ祈り且つ議した。選に當りし代表者は其後幾度も相諮り、特別の祈禱會をも催して三月廿六、廿八の兩日に行はるべき四つの集會の準備を整へたのである。

日曜の集會 靈と肉と信仰と愛とを以て兄弟姉妹共に救されし罪人として、神の御許に集る。聖靈の賜ふ感謝と歡喜と希望の外に何等の理由動機も無い。其處に執

るべき言行想は主が既に充分に備へ置き給ふのである。彼等は各目日毎に十字架を負ふて戦ひ、額と云はず胸と云はず幾多の傷手を帯びし者なれど、平和の子の康き姿にて集り来る。眞の基督者の保つ日曜の集會は何の豫徴であるであらうか。

一、プリスキラ夫妻の特長

山辨儀市

一、不義不虔に對する神の怒

大島正健

一、神の大經倫(創世記と進化論)

大賀一郎

一、内外の變調に對する我等の態度

藤本武平二

一、奇跡を通して見たる基督の生活 齋藤宗次郎

有るか無きかの信仰を獻ぐるなるに高き眞理を賜はり、數ふるに足らぬ愛を以て互に愛するなるに強き慰めを與へられて歸る。尊きかな神の愛。

銃音の下にて 靜肅を愛し平和を慕ふ心を以て主と

偕に全集の仕事に當つて居る時に、屢々戸山ヶ原の方より突如たる小銃機關銃の銃き音は耳朶を襲ふて来る。是れ壯者野を走つて戦ひを習ふ所であらう。罪に沈める全世界の人々の今も猶避け得ざる非倫の行爲である。我れ之を聞いて痛く悲しむも敢て驚かない、又憤らない、我等は信ず、神と基督とは永遠に在り給ふことを。曾て希臘語を以てガリヤ人ギリシヤ人等に新約聖書を書かしめ給ふ前に、かのアレキサンダーは大軍を率ゐて東歐西

亞埃及を略取し、其範圍内にギリシヤ文化の普及を計りて不知不識の間に、キリストの福音傳播の爲に道を備へた。又羅馬のアウグスツスは軍を陸に海に動かし基督の直前に於て天下を歸一し、道路網に力を注ぎし結果、諸國の民が、ベンテコステの日にユダの都門に集り来るに便し、使徒パウロ、ペテロ等の傳道に資することゝなつた。其他北歐の民が福音に參る前にゲルマン蠻族は劍を馬上に揮つてローマに敵し、清教徒が信仰の自由を求めて米大陸に移る前にはチャールズの虐政があつた。此等歴史上の大事實に徴すれば、東亞の一部滿洲の曠野に犠牲的戰鬥を續くる事も、イニスキリストの救世の福音が將來日本より支那全土に傳はり更に安南暹羅印度波斯等に及ぶ開拓の前提となるやも知れない。勿論劍と福音とは何等の關係する所なく不義は何れの國民たるを問はず何時かは必ず罰せらるゝに相違ない。我れ之を思ふて泣く。されど宇宙は神の所屬であつて神は常に人間の如何なる仕業をも利用し善用して其正義と愛の聖圖を遂行し給ふ。大局に立つて之を洞觀し得る者は福である。而して今現に獨日本又東亞のみに限らず人類の凡てを其根源に於て教ふる不朽簡明の大文字は彼等の靈に注がるべく結集されつゝあるではないか、我等が心最早神に因りて定れり、砲聲銃音天地に轟くも何んぞ我等の平靜を破る

を得んやである。

植木夫人永逝 醫博植木良佐氏夫人好枝子逝く。齡四十。三月一日柏木聖書講堂に於て告別式を擧げられた。始に臨んで突然式の次第は變更された。眞に信仰と愛の誠實の表現であつて寔に意を得たるものであつた。司會聖書朗讀祈禱履歴口述等悉く夫君自ら之に當り、宛然家庭の親和の集會であつた。最後に獨、自ら進んで感話を述べられし塚本虎二氏は、彼女が結婚當日より永眠まで數年間病褥に就きたる所謂不幸不遇の生涯の事實を熟視し是れ誠に高貴なる人生を送つた。夫に對し最善最善のもの捧げし結婚生活を遂げた。人生を正解する尊き教訓を家人と此世に遺して去つたといふ神の深き精神を感慨の氣息を押へながら諄々と説いて式を結んだ。信仰によつて死を踐み蹂りし彼女の勇ましく又美はしき一生を記念するに相應しき會合であつた。

洗足會 社會は益々複雑になつて行く、世界の事情は益々紛亂に向つて進む。然るに我等の處世の精神と態度とは之に反して益々單純になつて行く。百千の難問も唯一のキリストの十字架を以て解することが可能。爾うあるは本當だと思ふ。我等の洗足會は謙遜を學び又之を實行する間に、常に此尊き信念を養はるゝを感謝するものである。二月例會は代々木なる望月兄宅に開かれた。

集る者十四名、實のある經驗談、力ある祈禱、中野氏の入會もあつて感謝に溢るゝ恩恵に浴して散じた。

青山齋場の前に立ちて 某日此處に堺利彦氏の告別式が行はれた。余は嘗て理想團の一員として社會改良に活躍せし時、支部發會の件に就き氏を萬朝報社に訪ふて其意見を聞き、其後二回晚餐會に席を共にして相語りしを思ひ、當時の故人に對し禮儀を表せん爲に式場に立つた。余は今鬪争的無宗教葬の模様を報せんとするものでない。其時の所感を一言せんとするのである。氏は社會改良を唱へ又非戰論を叫んで國家に盡さんとせし心意は嘉すべきも、外部の社會組織を完備して個人に及ぼすの法は吾人と相反する所である。神の攝理も基督の贖罪も永生の希望も無きが故に事々に悲憤し反抗し争闘し、以て理論と慾心に據る人意の計畫を短時間に實現せんとし焦慮するを以て、徒らに破壊の悲運に終るのである。氏が若し萬朝報社に記者たる頃其側にて絶えず説かれし基督の福音を信じ、第一に罪の赦免に預つて新生の體驗を味ひ又之を世に傳ふること、氏が社會主義に活動せし努力と年月とを以てするならば如何に世を益すること多かつたか知れない。されど氏今は無し。世の同主義に立つ人々醒めて轉向を決し先づ自己改良を以て第一歩とせん事を勸むるものである。警官の勞を思ひつゝ去つた。

棄 教 問 答 (上)

江 原 萬 里

眞實、基督教、十字架

主「やあ、久しぶりによくこそ。何か御用ですか。」

客「いや、別に用事はありませんでしたが、何だかあなたにお會ひし度くて來ました。」

主「それはどうも有り難う。でも不思議ですね、何か私にあなたを引つけるものがありますかね。」

客「え、私は今では基督教は大きらひになりました。

若しあなたが基督教者でなければ今までも私はもつと度々お訪ねしたでせう。私があるのを忘れられないのはあなたの基督教ではありません。私の周圍に餘り見られない人間としての眞實があるのです、それが私に氣に入つて居るのです。」

主「それは面白いですね。私にそんな眞實がありますか

ね。然し若し私にそんなものがあるとせば、それは勿論あなたのお嫌ひになる基督教から來てゐると思ひます。ですから私に基督教をやめて、その眞實だけになれば、もつと善いと御注文は無理な注文ですね。」

客「私も宗教は人間に必要だと思ひます。それで今では南無阿彌陀佛ですつかり満足しました。元々私の家が佛教なので、私も落付くところに落付いたのだと思つてゐます。若し私が今も尙昔のやうに熱心に基督教を續けて居たら、多分生命がなくなつて居たと思ひます。南無阿彌陀佛をやつと氣が樂になつたのです。」

主「そうですね。それは結構です。私は淨土眞宗について深い尊敬をもつて居ます。然しあなたの基督教についての御經驗は丁度私と正反對ですね。私は一昨年或る醫者から喉頭結核だと診斷され、他の或る醫者から半年位の壽命かも知れないと云はれたのです。それが今こんなに元氣にあなたと話し合つて居るのは、基督教の御蔭なのです。これは私の知人は誰でも認めてくれて居ます。あなたも誰かにそう仰つたといふ事を聞

きました。私があなたのやうに基督教をやめたら、今生命はないでしやうね。」

客「それはそうかも知れませんか。然し、南無阿彌陀佛の方が私には氣樂です。基督教には十字架といふ餘計なものがあります。あれが私には恐いのです。」

主「どうしてそんなに恐いのですか。」

客「道徳で私をせめつけるからです。」

主「キリストの十字架は道徳の命令ではありません。福音です。喜ばしい音づれ、あなたの云はれた道徳でせめつけることでなく、それからの解放です。あなたが望んで居られるやうに氣樂になることです。私は基督教によつて始めて心の一番深いところに安心が生じ、神様がほんとうに有り難くなりました。此の安心はキリストの十字架がわかつたからです。一體あなたは基督教で云ふキリストの十字架をどう云ふ風に解して居られますか。」

客「キリストの十字架とは、人間が神に對して犯した罪を、神が直接私たちを罰する代りに、キリストを十字

架に釘けたと云ふのでせう。」

主「そうですね、私もそう解して居ます。それが何故あなたには恐いのでせう。又それを信じ續けて居たら今日までとても生命が續かなかつたであらうと思ひ、それを捨て、始めてほつとしたと云はれるのはどう云ふわけですか。私にはわかりませんね。」

客「それはキリストの十字架は私たちの罪の赦だと思ひますが、同時に私に義しくあれと要求します。私達にキリストと一緒に十字架を負へと命じます。それが私には堪えられないのです。」

主「そうですね。あなたの御話を聞いて居ますと、パウロがガラテヤ人に云つた言を思ひ出します。」

愚なる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられ給ひしまゝなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顯はされたるに、誰が汝らを誑かししぞ。我は汝らより唯この事を聞かんと欲す。汝らが御靈を受けしは、律法の行爲によるか、聽きて信じたるによるか。汝らはいかにも愚なるか。御靈によつて始まりしに、今肉に

よりて全うせらるゝか。

あなたを馬鹿といつては失禮ですが、あなたの十字架観は「御霊によりて始まりしに、今肉により全うせらる」と思ふガラテヤ式十字架観ですね。あなたはキリストが十字架で死なれたことによつて、神が私達の罪を全部御赦しになつたといふ事を徹頭徹尾信じ抜いてこれを自分の新生の基礎とせず、却つてキリストの十字架を我等の生涯の模範として私達もこう云ふ悲惨な生涯、その峻はしい道徳生活に見習へといふ様に解せられ、それを恐がつて居られるやうですね。私はキリストの死が私の死であつて最早私には罪の死はない。あるものはキリストに在る新生命、この信念で始めて生存の意味を見出したのです。之がなくては生きてゐて本當の安心がないのです。それは別として、あなたは以前カルピンをよく讀まれたさうですね。」

客「私は昔カルピンが大すきでした。今でもきらひではありません。カルピンが現在の私の考の基礎を作つてくれました。」

主「そのカルピンからあなたが脱しやうとしてもがいて居られる様子が私にはよくわかります。然しそれから逃れる道はもつとカルピンを徹底的に研究することだと思ひます。」

客「いや、もう横文字の本はこりこりです。南無阿彌陀佛で澤山です。」

主「その邊に私とあなたとの根本的相違があるのでしやうね。私は實際行き詰つてキリストの十字架で始めて安心を得たのです。それでやつと人生に希望を見出しました。それ故喜悅が出て來て生きることゝ感謝があるやうになりました。今苦しいことが澤山あつても、それに堪える力を見出しました。現在生きて居ることと爲て居ることに意義があることを知りました。何事にも疑問の多い私が神は本當に愛だと確信し得たのもキリストが十字架で死に給うた事實があるからです。

第一神に祈つて手ごたへがあることを經驗するやうになつたのもそれがあるからです。」

客「あなたの方がはつきりして居られる。」

主「そうです。私は眞實に頼るべきものを見出し、それに頼ることが出来ました。神の愛を感じ、感謝し、その愛によつて少しなりとも人を愛することが出来るやうになりました。あなたが私に眞實らしいものがあると認められるのも、此の信仰から來て居ると思ひます。私が基督を捨てるのが出来ないのは此の十字架があるからです。」

客「あなたは神は愛だと云はれますが、そんならどうして此の世の中にこんないやな事が澤山あるのですやう。私は此の世を少しも善い世の中だと思へません。」

主「それが私には神の愛なる證據です。神が人間の罪を無視して居られないから世がかやうに不幸に満ちて居るのです。世の不幸は人が神を信じない罰です。そしてその事は神が不義でなく義であり給ひ、義しい愛で私達を愛し給う故に、私達の不義を見遁し給はないからです。不義を不義としないやうな神は、本當に愛することの出来ない神ではないでしょうか。それは確かに神ではありません。」

客「キリスト教では義といふ事を大變やかましく云ひますね。何と云つても基督教は道德教です。そしてそれが私を苦しめます。私はそれから逃れ度いのです。」

主「あなたの云はれる通り、基督教は義に始まり、義に終ります。然しその義は神の義であつて人の義ではありません。人が義を行ひ得ないので、神が憐れんで之を救ふため、自らの義をお現はしになつたといふのです。一體義から私達が逃げおぼせることが出来るでせうか。私達に良心がある間は、そして神様が義でいらしやる限りは、弟アベルを殺したカインは何處を漂流しても弟の血が地から叫んだと云ではありませんか。逃げ得たと思つたらそれは自己欺瞞です。丁度頭かくして尻かくさずで、駝鳥が追跡者から逃げ得ず、遂に自分で頭を砂の中に突つ込んで、それで匿れ得たと思ふと同じことです。アダムとエバがエデンの園で罪を犯し、裸を恥ぢて木葉の衣をつけましたが、すぐ神様から見顯はされました。義から匿れることは不可能です。私達の唯一の逃れ道は神が御備へ下すつた義を私

の義とする以外にありません。然しそんな道徳問題はやめて、一體正義は人生にはいやなものでせうか。若し世の中が益々強盜、殺人、詐欺、掠奪の世となり、少しも正義が行はれなくなつても私達は安心して生きて居られるでせうか。社會に嚴然たる道徳的秩序が存在し、正義が公道として行はれ、私共はそれを歩み得ると云ふ事は私共の本當に願はしい事ではないでせうか。あなたそれがおいやなのですか」。

客「それはそうですね、正義は必要ですね。」

主「あなたは先には道徳で自分をせめられるのがいやだから正義は邪魔だと思はれ、今自分が他人から勝手に害を受けないためには正義が必要だと感じられるのは失禮乍ら、それは自分勝手ではありませんまいか。確かに御自身の生活の根本に何か大きな矛盾がある事に気がつかれませんか。」

客「……………」

主「私たちは義から逃避することは實際出來ず、又それは自分自身の都合から見ても決して望ましい事ではな

い事は明瞭です。只實際問題は、私達は願はしいとは心に思つても此の正義を完全に實行することが出來ず常に道徳命令で良心がせめられて苦しみます。そして義の要求を満して居ない事を知るたびに心に不安があり、喜悅も希望もなく、行先が暗く見え、生きてゐることが重荷となつて來るのです」。

客「確にそうですね。」

主「どうしたら義の要求を満し得るか。これこそ何をするにつけ、人間としての生存の根本問題ではないでせうか。そして私はキリストを信ずる信仰によつて始めてその道を發見しました。私の不義がキリストの死で清算され、キリストを信ずることで義とされ、新らしい靈的世界が眼前に展開して來ました。私の道徳的努力によらずして、神の聖さが私を高めます。この聖の獲得、之が人生の至福だと私は思ひます。」

(以下次號)

身邊漫筆

○春が来た。梅が満開。櫻が今に咲く。永く冬の寒さに
 虐げられて居た生命が萌えて出て来たのである。我等の
 靈魂にはいつ春が来るであらうか。今はまだ冬である。
 空はどんよりして曇つて居る。然し眞冬のうちに樹木は
 既に春の用意をしてゐるやうに、今現に我等は新らしい
 時代の用意を爲しつゝある。何者かが我等の裏に在りて
 我等を動かしつゝある。

○私は此の度長き祈の後起ち上つた。今月から鎌倉の目
 抜きで場所を福音を説くことにしたのである。此のため
 書を三谷及び矢内原兩君に送つて加勢を乞ふた。私の此
 のマケドニア人の叫び聲（使徒行傳一六・九）に、兩君から
 丁度響の物に應ずるやうな快諾の返事が来た。それで従
 來私と一緒に月一回聖書を講じつゝあつた山田君と私と
 同志四人、陣容は既に成つた。嘗て僧日蓮が鎌倉の目抜
 きの辻に立つて法華經を説いたやうに、我等は毎日曜日
 鎌倉の中心に立つて聖書を説く。

○數日前久し振り醫學士池田千壽君が來訪された。三年
 前私は同君の灸で大に健康を回復したのである。同君に
 「僕程お灸の効いたものも珍らしいでせうね」と語つて
 同意を得た。それ程同君は私の健康の恩人である。とこ
 ろが此の度私の健康を診察して曰く、「あなたの右肺は
 全く駄目、左肺も大分やられてゐる。普通の人ならば差
 し當り絶對安靜ですわね」と。是が今の私の健康状態である
 ○然るに戲談ぢやない、私は之から蝸居を出て大に福音
 を説くつもりで居るのである。醫學上よりせば亂暴此の
 上なし、天下の大馬鹿者である。實際私は肉體で生きて
 居ない。「我キリストと偕に十字架につけられたり。最
 早われ生けるにあらず、キリスト我が内に在りて生くる
 なり。今われ肉體に在りて生くるは、我を愛して我がた
 めに己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くる
 なり」。文字通りそれである。聖書の此の言は神の御言で
 あつて、而して又私の生命の言である。聖書の文字的研
 究は之を聖書學者に委ねる。私は私を生かす生命の言の
 證しをするため生きて居る。

○チヨーチ・バロウが英國の田舎を旅行して鑄かけ屋に出會つた。鑄かけ屋は彼を傳道師と見誤つて『わしに神様をおくれ』と云ふので、彼が金をやると、『金はあるから要らない。神様をおくれ』と云つた。現代人は金をほ

しがつて居るが、本當にほしいものは矢張り金でなくて神様である。彼等は、金以上に頼りになる、心に喜を與へ、力づける超自然的のものを求めて、然かも得られないので金をほしがつて居るのである。心中本當に嘆いて求めて居るものは金ではない、自分の靈魂の救主、神である。『主よ、我に父を示し給へ、然らば足れり』とビリボが云つたそれである。

○現代程人が神から離れて其の心が暗くなり、喜悅を失ひ、力を失ひ様々の説に迷ひ、様々の事に惱んで居る者はない。彼等はそれが罪の惱みであることを知らない。罪とはもつと神學的なもので自分らとは縁の遠いものであるやうに考へる。だが、彼等程罪に惱んで居るものはないのである。而して此の罪から赦され、黒雲が取り去られて天日を仰ぎ得るやうに、靈魂が神の眞の御姿を仰

ぎたく願つて居る者はない。『金はいらぬ、わしに神様をおくれ』。本當に納得の出来る、生かす、喜に満たさす神様を示してくれ、さらば足れり、と心に叫んで居るのである。

○然るに一方此の要求に應じて『神様を興へ』やうとして現代程矢鱈に宗教書類が刊行される時もない。次から次にと雜誌、リーフレット、パンフレットが出て、『エホバを知る知識』の洪水の世となつた。然かも一向彼等を満足させない。何故だらう。彼等の求めてゐるものは神學的又は聖書の知識ではない、力である、體驗である實際神に由つて生き動き在り、それで沮喪した意氣を回復し、困難に打ち克ち、義しい聖い勝利を得た生涯を送り得る實證がほしいのである。ペテロが乞食のちんばに『金銀もなしに。わしに有るものをやる。ナザレのイエス・キリストの名によつて歩るけ』と大喝した。そして右手を執つて起したところ、ちんばは躍り上つて歩き出した。此の力、これを現代人は求めて居るのである。

基督教講話會

四月九日の第二日曜日より引續き毎日曜日、當鎌倉に於て左記の通り、聖書を講じ、基督教の大意を述べます。光明を求めつゝある方、善き生涯を送り度しと願ふ方、眞面目に基督教を研究しやうとする方の來會を歓迎します。

鎌倉町山井ヶ濱二丁目、キング商會別館

毎日曜日午前十時より約二時間

(五十音順)

講師

『聖書の眞理』主筆

法學士

江原 萬里

第一高等學校教授

法學士

三谷 隆正

東京帝國大學教授

法學士

矢内原 忠雄

府立高等學校教授

文學士

山田 幸三郎

毎回 二十錢

尙詳細問ひ合はせ度き方は左記へ

聽講料

鎌倉町扇ヶ谷三四三 江原方

内村鑑三先生記念關西講演會

日時

四月三日 九時半及び二時(大阪) 午後七時(京都)

場所

(一) 大坂堂島渡邊橋北一丁目 中央電氣クラブ
(二) 京都左京區近衛通 樂遊會館

講師

畔上、金澤、黑崎、塚本、矢内原の五氏

聽講料

各回 二十錢

聖書の眞理定價 (送料共)

一 部 二十錢
半年(六部) 一圓十錢
一年(十二部) 二圓十錢
海外一年 二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番) へ。獨立堂にてもよし

昭和八年三月廿八日納本

昭和八年四月一日發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷 江原 萬里
兼發行人

發行所 聖書の眞理社

東京市神田區三河町三ノ四
印刷所 今井印刷所

東京市澁橋區百人町二丁目三五四
發賣所 獨立堂書房

振替東京九六八番

【本誌定價二十錢】